

最終回 : よりよい ODANGO をめざしてー援助は誰のために

国際協力の「現場」で働いている人たち（たとえば JICA 専門家や協力隊員たち）の話を聞くと、「技術協力という仕事で派遣されてきて、何かを教えるあるいは伝えるという立場で来たはずなのに、逆に相手側から教えられることの方が多かった」、という発言がよくある。この言葉が端的に示しているように、「援助」とか「国際協力」は先進国から途上国への一方通行の流れではない。特に農村開発の場合、いわゆる「村」はたしかにさまざまな問題を抱えている。そしてそれを少しでも解決するために、外部からの支援（援助）が必要なのも確かだろう。しかし、それは先進国の考え方や手法を一方的に押し付けるやり方では解決しないのではないのか。実は、それぞれの地域に脈々と流れてきた、伝統的なものの中にその答えがあるのではないのか。

たとえば、営農システム。従来は多くの農村で、その地域で得られる資源をうまく利用して、自然な形で「複合農業」や「資源循環型農業」が行われていた。AAINews22 号で既に紹介したラオスの農業もその一例である。ところが、先進国による「近代的な」農村開発計画の実施によって、農作物の増収や農家の収入向上のために高収量品種や商品作物が導入され、肥料・農薬・農業機械の投入がなされた。しかし、その結果として、地域の資源循環システムは破壊され、農家は農業資材や高価な農業機械を買うために借金漬けになってしまった、という例は数多くある。

そうした「失敗」を繰り返さないために、そして地域に根ざした持続的な開発をめざすために、だから今、地域住民に密着して活動する、ということの意義が重視されているのではないのか。そういった文脈の中から、NGO の役割が再評価されている、ということができる。一方、NGO だけですべての問題を解決できるわけではなく、したがって「ODA と NGO の連携」というのは非常に重要なテーマである。ただこの場合、ODA 側が NGO を「便利な道具」として「利用」するだけでなく、お互いに意見交換でき、切磋琢磨しあえるような、真の意味の連携関係（パートナーシップ）を持つことが必要である。しかし、NGO との連携を「援助の効率化」といった観点のみから取り上げることが問題であろう。「援助の効率化」というのもまた、援助する側の都合でしかないのだから。

最後に、当然ながら、ODA はもちろん、NGO も開発の中での「主役」ではない。そこに住んでいる人たちが、自らを「主役」として認識し、自分たちで考え、行動を始めた時に何かが動き、変わってくるのではないのか。ODA や NGO はそのための「触媒」の役割であり、あくまで支援である、という原点はつねに忘れるべきではないだろう。海外の NGO を見ていて感じるのは、日本の NGO がほとんどそうであるような「善意のボランティア団体」というより、（営利目的の）会社組織に近い。そこには、例えば役所や他の企業に勤めるよりも高給が得られる、やりがいがある、という理由から優秀なスタッフが集まっている。ところが、そうした組織であるが故に、逆に組織を維持するために開発プロジェクトを実施しなければならない、つまり国際協力活動が資金調達の手段になっているという一面があることも事実である。援助に携わる人たちの最終的な目標というのは、何なのだろう。いつまで援助すればいいのだろう。そのプロジェクトが地域住民のために役立つということはもちろん重要なことであるが、援助される側の人たちの自立、ということを常に念頭におくべきだと思う。



伝統的工法による小規模取水堰



土木工事による大規模ダムと発電所